

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第3章「制御不能」

福島第一、第二原発の事故では、現場の状況を想像できない東京電力本店の言動に、現地で対応している所長らがいら立ちをあらわにする場面が何度もあった。第二原発所長の増田尚宏(53)もよく覚えているシーンがある。

「富岡線を切ってもいいですか」

東日本大震災が起きた3月11日の午後6時すぎ、本店で送電網を管理する担当者から打診があった。第二原発では4回線ある外部電源のうち、富岡線という1回線が停電を免れた。富岡線は東電の配電網の一部だ。

第二原発では富岡線の電力を使っ

現場を想像できぬ本店

3



福島第二原発の緊急時対策本部で指揮を執る増田尚宏所長(前列左から2人目)＝2011年5月(東京電力提供)

感覚に違いがくぜん

て原子炉に水を入れたり、炉内水位計や圧力計を見たりすることができていた。富岡線を使えたことが結果的に、全ての外部電源を失った第一原発と明暗を分けたといっても過言ではない。本店担当者はその命綱の富岡線を切っていくかと言ったのだ。

増田は耳を疑った。そしてテレビ会議で訴えた。「これがなかったら第二は終わっちゃってますよ。そうしたらTF(第一原発)と同じになっちゃってますよ」

一方で首都圏を中心とした東電管内では震災に伴い400万户以上が停電していた。

「首都圏からはるかかなたに一本ぶら下がってぶらぶらしているシステムなんて切っちゃった方が、首都圏の復旧が早くできると考えたんじゃないですかね。第二原発を何だと思ってるんだ。ぶさけんじゃねえと思いました」と増田は振り返る。

原子力施設で起きた事故の深刻度を示す国際的な評価尺度(INES)で、第一原発事故は史上最悪のレベル7とされた。第二原発は8段階で下から4番目のレベル3(重大な異常事象)だったが、一歩間違えば状況はもっと悪化していた。

また13日ごろには原子炉注水に使える「ろ過水タンク」の水が減り、枯渇してしまった。津波で破損した配管から水が漏れていたのだ。

原子炉に注水する水はまだあったが、余裕がある状況ではなかった。

増田は本店に「4千ト」の水を送るよう求めた。

「何とか水が調達できたので送ります」。本店から回答があったが、手配したのは「4千ト」の給水車だった。

「われわれが欲しかったのは原子炉に入れられる『4千ト』だったんですけど、本店は飲料水を集めているつもりだったんでしょう。それで『4千ト』になっちゃったんでしょうね」

増田は「これほどまでに感覚が違うのか」とがくぜんとしたが、怒りはしなかった。そして免震重要棟の緊急時対策本部内にいる部下たちに向かってこう言った。

「もう人を当てにしても仕方がない。自分たちでやろう」(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)